魔都◎怪奇想曲
帝都歴異妖者奇譚 其ノ五
Adult Only
蓮玉兎
Ren Gyoku To

「あいつだけは駄目だ」

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

この世界には人間以外のものが存在する。
例えば、日本の帝都。
長く時を経た食器や雑貨が魂を持ち、妖怪へと変化して、そのまま蔵に住み着いたり。
二十年を超えて生きた猫の尾が割れ、行灯の油をぺろりぺろりと舐めたり。
柳の傍らに、ぼんやりと立つ影の薄い幽霊がいたり。
極稀に、羽目を外した彼らの大集合である百鬼夜行が空を横切ったり。
それらすべて、まとめて異妖者（こともの）と呼ばれている。
そして、帝都だけでなく世界中に存在する。数多に――

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

魔都・怪奇想曲

帝都歴異妖者奇譚　其ノ五

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

一・妖主従　御出座（オデマシ）

金、翡翠、紅玉、蒼玉、青磁、白磁……赤を主体に華々しく彩られたその部屋は、無数の宝物で溢れかえっていた。しかし、部屋に充満する空気は、それを汚（けが）すかのように暗鬱としている。

「あんなものに興味を持つから、そんな目に遭うんだ」

その声は、この部屋には関係の無い者……侵入者の声。

侵入者の磨き込まれた革靴が、血塗れの艶やかな床を踏む。

血は床に溜まるだけでなく部屋中に飛び散っていた。

夥（おびただ）しい量の血であるのに、床に転がる躰は一つだけ。

それは長身の侵入者の頭を優に越し、正方形を主体とした優美な模様で装飾された天井まで届いていた。

「……ア……ウ……ウ……」

で、あるのに、声は侵入者の膝元でした。

雲が切れ、窓から入り込む月明かりが部屋を照らす。血の池の床から侵入者の足元、そして、一つの躰に。

それは躰というより、肉塊だった。所々に入る横筋から、ぶしゅっ、ぶしゅっと不定期に血が噴き出す。

あちこちに埋まる目玉の群れはきょろきょろと忙しなく動き、だらだらと涙を垂らす。点在する唇群はだらしなく涎と血を垂らし、低い呻きを上げている。

侵入者の膝元からの声の主は、辛うじて人間の顔を成していた。きときとと素早く動く右だけとなった目玉が侵入者でぴたりと止まる。

「タ……スケ……ロ……」

「それが人にものを頼む態度かね。まったく……盗人であるうえに傲岸不遜（ごうがんふそん）とは如何（いかん）とも救いがたい」

侵入者は大仰に首を左右に振って続けた。

「はてさて、これは何人分の肉塊かな。ひい、ふう……ざっと十人分か。察するにあれに魅入られ、取り分でもめたといったところかな。しかし、その諍（いさか）いさえもあれの仕業と気づいたか？」

「……ア……ウ……」

「長年あれを管理しているが、ここまで見事に人を同化させたのを見るのは初めてだ。かなり粗雑に扱い、気分を損ねたのが原因だろうな」

「……ウ、ア……ッ……」

肉と肉の横筋の隙間から、ずるり……ずるりと蛸の足のようなものが一本現れた。それは侵入者に伸ばされる。縋

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

るように。
侵入者はそれを躊躇なく踏みつけた。ぐしゃりと湿った音をたてて潰れる。
「残念乍ら、こうなった者を助けることはできん。喩え、方法があったとしても助ける気にはならん。何せ、お前達は儂を虚仮にしたのだからな。しかも隷属の術なんぞを使って」
月が雲に隠れる。侵入者の顔が影の中に沈み込む。
「どんな気持ちだ？」
影の中で侵入者が嗤う。凄味に肉塊は呻くのをやめる。
「あれを盗み、こんな風になってしまった今、どんな気持ちだ？　始めは手に入れた喜びで、さぞかし欣喜雀躍したことだろう。それからこんな姿に……もう人間とはいえん姿になった気分はどうだ？　助けを求められるんだ。感想くらい言えるだろう？　さあ、言え。どんな気持ちだ？」
侵入者の凄味は、膝裏にお見舞いされた一発の蹴りで霧散した。
「何やってんのさ、マスター。弱いもの虐めしてる暇なんかねーってのに」
甘い砂糖菓子のような少女の声に、侵入者は口をへの字に曲げる。
「少しくらいいいだろう。こいつらのおかげで倫敦は大変なことになっているし、儂もお前も上海くんだりまで来る羽目になったんだぞ。虐めさせろ」
「もう充分虐めただろ」
強い風が雲を追いやる。月光が一気に部屋を照らした。
侵入者の隣に立つのはメイド服を纏う華奢な少女だ。
「よっと！」
鋭く上がった少女の足が肉塊にぶつかった。白タイツに包まれた形良い脛に、術者に従属を誓う言葉が刻まれた呪痕が浮かび上がる。パンッと軽い音がして肉塊はすべて灰となった。
くるくる巻の短いストロベリーブロンドの下の頬がぷくっと大きく膨れる。窄められた唇からふっと吐かれた息に呪痕が纏う。華美な部屋の隅々に呪痕が広がると、灰と血は跡形もなく消えた。
「お掃除完了〜。さあ、さっさと探すよ、マスター」
月が最初の侵入者を照らす。長身の老人だ。堂々とした獅子の鬣を想起させる長い白髪。鎖骨まで届く立派な髭。その先は一つだけ三つ編みが作られ、丸から四角、花型にと姿を変える水晶で飾られている。

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

英国魔法結社創設者でありナンバー1である、オベロン・リアファール・ザナンは、右の片眼鏡（モノクル）の位置を正して言った。

「探さなくてもわかるよ、トリッシュ。ここにはない。逃げおった」

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

二．金糸雀茶館ニテノ晩餐

光（ラザラス）と闇（珠少年）の邂逅の翌朝――

ホープダイヤ奪還成功の報を受け、妖精王オベローン・リアファール・ザナンはメイドのトリッシュを従え、英国女王騎士団上海支部を訪れた。

「抜け殻だな」

低く良く徹る声が、漆喰造りの小振りな客室に響く。

オリエンタルなソファの背凭れに身を預け、手にしたホープダイヤを翳し見るオベローンの前で、ラザラスは愕然と立ち竦んだ。

「そんな……その中に異妖者はいないと？」

「ああ。これはただのブルーダイヤと成り下がった。逃げたとしてもダイヤと共に在るはずだ。異妖者だけいなくなるというのはどうにも解せん。何があった？」

ラザラスは鏡の館(Mirror House)であったことを報告した。妹の姿に見えたダイヤの異妖者に惑わされ死にかかったこと。その『妹』を日本人の女が喰ったこと。そして、その女が消えた後、ホープダイヤが残っていたこと。

「喰った？　異妖者をか？」

「はい。とても美味しかったから食べるのは当然と……確かに食べるような素振りではありましたが、本当に食べたのかは定かではありませんでした」

「ふむ。その女、他にはなんと？」

「異妖者からは同族喰いと呼ばれているらしいと……」

「その女、異妖者であるのかもしれんのか。しかし、妙だな。まだ繋がっているように見えるが」

何がと聞きたげな新米騎士に向かい、英国一の魔法使いは教師の表情で説明をする。

「ダイヤとダイヤの異妖者だ。極上の絹糸より細く、蜘蛛の糸のように切れやすい程度だが、まだ繋がっておる。だから、喰われた……消滅したというのがどうにも解せん」

「では、まだ存在していると……？」

「そうだ。消化不良か、女は食ったつもりだが異妖者は腹に逃げたのか……しかし、不思議だ。その女、腹に鏡でも備えているのか？　でないとダイヤの異妖者が無事な理由がまったくわからん。興味深い」

「そのホープダイヤは、まだ呪具として機能する可能性があるということでしょうか」

「ダイヤの異妖者さえ戻れば問題はない。これは代替えのきかん呪具だから、異妖者がこの中に戻るのが一番手っ取

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

り早く倫敦の守護魔法を再起動させられる。しかし、その喰ったという女がどこにいるのか……上海から離れたとすると厄介だな。ダウジングで追うには気配が薄いか……？　日本人というのが本当なら、昴子に動いてもらいたいが、倫敦が手薄になるからなぁ……倫敦を囲む簡易結界に、独逸の『猫と鴉』がちょっかいかけてきている気配もある状況で、昴子を日本に帰すのもなぁ……」

オベローンは瀟灑な漆塗りの机の上にダイヤを置き、パイプを咥えて腕組みをして、右に、左に、ゆるゆると上体を揺らした。

「ひとまず、上海中を捜します。できる限りの短期間で。まだ上海にいるようでしたら、必ず……」

ラザラスは、オベローンの前に跪く。

「必ず、この私が捕まえ、オベローン様の前に連行いたします」

「……などと大口を叩いたのに……」

ラザラスは独りごち、たっぷりの水で絵の具を溶いたような薄い青空を見るとはなく眺めていた。

ぼんやりと口を開き、壁に右肩を預けしゃがみ込んでいる。途方に暮れているのだ。

『日本人の女か……調べてやるよ』

聞き込み中、そう言ってくれた自称情報屋の男を信じ、有り金すべて報酬として渡した。

それから、二日が経とうとしている。

情報屋は帰ってこない。それどころか、アパートメントの部屋はもぬけの殻だ。

「……捜索の旅に出たのだろうか」

ラザラス自身も女を捜せる場所はすべて捜した。見つけることはできなかった。

日本行きの船の従業員にも聞き込みをしたが、女らしき客は乗っていない様子だった。汽車に乗ったのかもと思い、駅にも聞き込みをしたが、収穫はない。

「もう、上海を出てしまったのだろうか……」

ラザラスは長く重い溜息をついた。

「このままでは、オベローン様の前に顔を出すことはできん。どうすれば……」

青年が眺める空にほんのりと朱色が混ざりだした。夕暮れが近い。その証拠に、あちこちから食事の準備をする良い香りが漂ってくる。

「うう……あれほど飽きていたチャイナフードがこうまで恋しくなるとは……ぱらりと炒められた炒飯……小籠包……上海蟹……八宝辣醤……生煎饅頭……」

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

ぐうう、と長く尾を引く腹の虫を鎮めるよう、青年は腹に掌を添え、ずるずると背を丸めた。
「えらく景気のいい腹の虫だな。それに、白い服着て、そんなとこ蹲（うずくま）ってたら汚れてもったいないぞ？」
頭上から上海語（ポ）が降ってきた。ラザラスは顔を上げる。そこには左目に銀の眼帯をつけた東洋人らしき長身の男が、紙袋を小脇に抱え立っていた。
「腹減ってるのか。うちに来るか？　作りすぎやがるからメシ余らせてて困ってんだよ」
上海語から英語（キングス・イングリッシュ）に変わった。ラザラスも英語で応える。
「とてもありがたい申し出だが……言葉に甘えてしまっても良いのだろうか」
「かまやしねぇって。俺は雨月だ。あんたは？」
「ラザラス……ラザラス・ルークスという」
案内を兼ねて先導する雨月の後を追い、ラザラスは歩く。大通りから少しはずれた閑静な住宅街だった。初めて来る場所だが、地図で把握してはいるので、どこに何があるかはわかっている。
（こちらには、ナンバー3の別宅があったような……）

「上海（こっち）来て知ったんだけど、中華料理は客に残してもらう量で作るもんなんだってな。日本じゃそういうのねえからさ。毎度残ってると気が引けるんだ。だから、いきなり一人増えても問題ないんで、遠慮しないで食ってってくれよ」
日本と言われ、ラザラスは昨夜の女……ホープダイヤの異妖者を喰い、惚れ惚れとする太刀筋で戦う蠱惑的な黒髪の女のことを思い出す。
「あなたも日本人か」
「なんか混ざってるらしいんだけどな。一応、日本人ってことになってるぜ」
「日本人というのは、皆、そのように綺麗な英語を話すものなのか？」
「いやいや。ないない。日本で異国の言葉が話せるのは、勉強や商売に熱心な奴くらいだな。ほとんどの奴はちんぷんかんぷんだ」
雨月は何度も手をひらひらさせて全面否定する。
「あなたも商売で？」
「あー、そうだな。勉強熱心な頃もあったけどな」
騎士団に入団し様々な騎士と会った。
その誰とも違う、胡散臭いふわふわとした雰囲気を纏い

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

ながら、人懐こい笑顔を見せる雨月に、ラザラスは妙な親近感を覚えた。少し見上げて話すことで、故郷で修行をつけてくれた騎士のことも思い出された。
（年齢はいくつぐらいなのだろう。年上のように感じるが）
「着いた。ここだぜ」
雨月の言葉に、物思いに耽ながら歩いていたラザラスは足を止める。
そこは、西洋風と中華風の混じった赤煉瓦で造られた、三階建ての小振りな建物の前だった。
戸口の上にぶら下がる、鳥のシルエットが描かれた小さな看板を見て、ラザラスは目を見開く。
「金糸雀茶館（カナリアちゃかん）……！」
それはまさしく、英国魔法結社ナンバー3である白虹院（びゃっこういん）昴子の上海の別邸の名であった。
「なんだ、知ってるのか。ここって有名な店なのか？　ただいまー。客連れてきたんで、メシ食わせてやってくれー」
狼狽えるラザラスを雨月は気にも留めず、すたすたと店内に入っていく。
「お帰りなさいませ、雨月様。お客様をお呼びするなら、事前に教えていただきたかったです。食事が足りなくなるかもしれませんから」
「大丈夫だって、ミミ。どうせまた大量に作ってんだろ」
日本。正確な英国英語を使う日本人。あの女はナンバー3である昴子の名を出していた。そして、なんと言ったか。
――雨月には秘密にしておいてくれる？
とろりと濃密な琥珀色の蜂蜜のような声でそう言っていた。
思い出した言葉に、声に、ラザラスは総毛立つ。
「うおーい、起きてるか？　メシだぞー。美味そうな果物も買って来たぞ、珠沙華（たまさか）ー」
『雨月』は、今、『誰』を呼んでいるのか――再び、ラザラスは総毛立つ。
「あなたが雨月様がお連れになったお客様ですか？」
腰辺りからの声に、ラザラスは我に返る。
そこには理知的な黒い瞳の幼女が立っていた。
「その制服、英国女王騎士団の方ですね。生憎ですが、昴子様は不在です。ワタシは留守を預かるミミと申します。ご用件をどうぞ」
どう説明していいか悩んでいると、階段に白い影がふわりと揺れた。
それを見て、ラザラスは三度目の総毛立ちを味わった。
そこにはホープダイヤの異妖者を喰い、惚れ惚れとする太刀筋で戦う蠱惑的な黒髪の女――珠沙華が、白いネグリ

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

ジェとガウン姿で立っていた。
「細かい話は、メシ食って、ラザラスの腹が落ち着いてからでいいんじゃねえか？」
という雨月の言葉で、三人は円卓に座り、夕食が始まった。
「ごちそうさま」
上海に着いてすぐ、点心を四十皿食べた時とは打って変わり、珠沙華は小籠包の載った小皿を二枚、翡翠焼売を一枚食べ、箸を置いた。酒にもほとんど手をつけていない。その小食ぶりに、雨月は初めて会った時のことを思い出していた。
「今日ももうよろしいのですか？」
「ええ、ごめんなさい。私の代わりに彼が食べてくれるから、大丈夫よね」
珠沙華の言葉にラザラスはうっと喉を詰まらせた。二日、食事にありつけなかった衝動で、出されるものすべて平らげていたからだ。
「いい食いっぷりじゃねえか。見てて気持ちがいいぜ」
三皿目の蟹炒飯を食べ終えたラザラスを見て、雨月はニッと笑う。
「遠慮ができず、不躾で本当にすまない。二日食べてなかったものだから……」
人心地ついたラザラスは、ミミが出してくれたプーアル茶を飲んで小さく息をつく。そして、ちらりと珠沙華に目をくれる。
「もしや、あまり食べない者というのは……」
「ああ、俺の連れの珠沙華だ」
「ラザラス様と同じくらい召し上がっていたのですが、数日前から食が細くなられていて」
今、ラザラスは普段の倍の量を食べていた。それに近しい量を一度で食べると聞いて、苦笑する。
「悪食で、強欲か……とことんまで罪深い女だな」
それを耳にして、珠沙華は艶然と微笑んだ。
「あまり口が過ぎると、闇に包み込まれてしまうわよ？」
遅効性の甘い媚薬のような魅了の声。下腹から立ち上り、ゆるゆると背骨を伝う感覚を、若騎士は光を帯びる鋼の心で押し留める。
「なんだ、珠沙華とラザラス、知り合いだったのか？」
「ホープダイヤの異妖者に拐かされた者同士よ。協力して逃れたの。ね？」
珠沙華がまたラザラスに微笑みかける。今度の笑みには毒も邪も含まれてはいなかった。
「珠沙華がダイヤを探してる英国人がいたから渡してお

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

いたって言ってたのは、あんたのことだったのか。じゃあ、あんたも昴子さんの知り合いか？」
「ナンバー3のお名前は存じてはいるが、知り合いではない。俺はヴィクトリア女王の命により、ホープダイヤを探す手助けをしていた」
「ラザラス様は英国女王騎士団の方です。制服に見覚えがあります」
「そうだったのか。女王様の騎士にダイヤが渡ったなら一安心だな」
「そのことだが……ダイヤは確かに回収できたが、肝心の中にいた異妖者が行方不明だ。今のままでは無事回収できたとはいえん」
琥珀の瞳を鈍く光らせ、ラザラスは珠沙華を厳しく捉える。
「お前が喰った、あれがそのようだ」
『あれ』とは、ラザラスには妹に見え、珠沙華には祖父に見えたホープダイヤの異妖者のことだ。
「ということは、曰く付きのダイヤが倫敦を守る魔法の核っていうより、ダイヤの異妖者の方が核だったってわけか？」
「オベローン様はそう教えてくださった。そして、代替えのきく呪具ではないとも」
ラザラスの話を聞いて、雨月は腕を組み、右手の人差し指と中指で眉間を擦る。
「……そっか～。そこからかぁ。まあ、外出できるようになったのが最近だからしょうがねえかぁ。尠鬼喰ってる時に気づいてたら防げたかもなぁ……あのな、珠沙華。一人で出かける時は一声かけろってのに、外で落ちてるもの喰っちゃ駄目ってのも追加な」
「出かける時に声をかけるのは大丈夫だけど、食べるなは……難しいわ。どうしよう」
「どうしようじゃねえよ。お前が見境なく喰っちまうから、こんなことになってるんだよ？」
「困りましたね。これをオベローン様が知れば、珠沙華様がどんな目に遭うかわかりません」
聞き分けのない幼い子供とその親のやりとりのような会話を止めたのは、冷静なミミの声だった。
「そういや、俺、それっぽい爺さんとメイドとすれ違ったぞ。俺くらいの身長の爺さんはチンピラ拷問するって息巻いてて、華奢なくるくる髪のメイドは、ぞんざいな口ぶりで適当にあしらっていた」
「それは間違いなく、オベローン様と、お付きのメイドで

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

あり、英国魔法結社ナンバー2であるトリッシュ様だ」
やっぱり、と雨月は思う。
「俺も、騎士団の方々からしか聞いてはいないが、オベローン様は生命全般に頓着がない印象だと……拷問をするのは、時間短縮の為の合理的解決方法だと思っているのではと教えてられている」
「ああ、なるほどな……そこが、慈蛍と似てるのか」
「慈蛍？」
「俺がガキの頃から世話になってる坊さんだ。オベローンって爺さんとどっこいの碌でなしの生臭坊主なんだ」
「そういえば、あなたに渡したあのダイヤはどこにあるの？　あなたが持っているの？」
珠沙華の質問に、ラザラスはうっと声を詰まらせる。
「まさかとは思うけど、オベローンの爺に渡したんじゃねえだろうな？」
畳み掛けてくるような雨月の問いに、ラザラスは目を逸らした。
「あら。オベローン爺さんに渡さないでってお願いしたのに……聞き入れてくれなかったのね。昴子さんがそう言っていたことも告げたでしょう？」
「……っ、大丈夫だ。昴子様とオベローン様はあまり仲がよろしくないと聞いている。そのせいかもしれん」
「昴子様は、そのようなことで相手の技量を推し量るような狭量な方ではありません」
無表情なミミだが、ラザラスの前に料理の載った皿を置く音がワントーン、高く、大きい。
「ん……ちょっと待て。さっき、異妖者が行方不明って言ったな？　珠沙華が喰ったのに、消滅していないってことなのか？」
そのことに気づいた雨月に、ラザラスは感心しながら説明をした。
「オベローン様が仰るには、ダイヤと異妖者はまだ細い糸で繋がっていると。だから、消滅しているとは思いにくいと」
「それを探してて、街で途方に暮れていたのか」
「……そのようなものだ」
渡すなと言われたダイヤをオベローンに渡したことを揶揄されてしまった後では、詐欺にあったせいとはラザラスは言えなかった。
「妙な話だな。喰ったのに消滅してないってのも。ひょっとしたら、珠沙華が食欲ないのって、ダイヤの異妖者を消化し損ねてるせいだったりな」
「案外そうかも」
軽口のつもりだったが、珠沙華の肯定に、雨月は幾度か

2018 RENGYOKUTO RikaRokka

瞬きをした。
「……異妖者の消化不良に、普通の消化薬って効くのか？」
「完全に消化されては困る」
「雨月様もラザラス様も落ち着いてください。もし消化不良だとしても、それをなんとかできるのは上海ではオベローン様だけかもしれません」
「だけど、爺は珠沙華をどう扱うかわかんねえんだろ？」
ミミは無言のままだ。それは肯定を意味しているのだろう。雨月は大きく溜息をつき、天を仰いだ。
「面倒だから、日本帰るかぁ。つか、それだと昴子さんに追いかけられっかなぁ……あの人相手に勝てるかなぁ……」
ガタン、と、床が鳴った。天を仰いだまま、雨月は目を向ける。強い表情でラザラスは立ち上がり、雨月を見下ろしていた。
「逃亡は許さん」
「許さんって言われてもなぁ」
――悪魔の一匹や二匹、どうなっても問題はない。
ラザラスはそう思う……が、ラザラスの目はずっと追っていた。愁いを帯びた麗しい顔を。夜の清流を想起させる真っ直ぐな長い黒髪を。その隙間から覗く極上の黒曜石の如く滑り光る黒瞳を。
オベローンに伝えてしまったら、この美しい同族を喰らう異妖者はどうなるのか――
「取り敢えず……！」
引っ繰り返ったうえにかさかさの声で、ラザラスは続けた。
「取り敢えず……お前達を監視する為に、俺もここに滞在させてもらう」

2018 RENGYOKUTO RikaRokka